

変わることもあり、敗戦国民は、まったくみじめであった。冬になると凍死者も出た。中央軍の将校と親しくなってもわれわれは亡国民といわれ、切齒扼腕するのみであった。生活は売り食いでも翌年胡蘆島にたどりつき、引き揚げの国旗をみて、始めて救われたと思った。

国旗を大事にせねばならぬ。いざとなれば、軍も領事館もあてにならぬ亡国民となることを知っておくべきだ。

敗戦後の記

岐阜県 松岡末次

「マーチオカおるか。」今夜もまた呼び出される。断ることのできぬ否応なしの呼び出しの声。零下十数度の冷気が外に出た途端に身を包む。保安隊員の出迎えた。旧陸軍の三八銃の安全装置を外す音が痛く響く。

保安隊詰所の中はストーブがゴーと音をたてて燃え、息が詰まるくらいの熱気である。「工員の某が病気で欠

勤した時、薬と言って毒薬を与えただろう。」そんな覚えは絶対無い。「嘘を言うな。」「嘘と言うなら証人を連れてきて欲しい。」「いつまで嘘を言う気だ。」「よく調べて欲しい。」そんな問答の後は、「よく調べるから今夜は帰ってよろしい。」数日このような詰問が続き、最後はきまって、「帰ってもソ連の警備兵に絶対言ってはダメだぞ。」と念を押されて詰所を出る。「今夜も無事に済んだ。」とホッとしながら……。

松川氏の尋問途中での発疹チフスによる死亡。松尾氏と守衛長の安田氏が拉致されて以後戻らず、消息不明になった同僚だった各氏のことを思いながら、わが身の安全だったのに感謝し、凍てついた凍雪の凸凹に足を取られつつ、凍傷になった指を屈伸させながら帰る。いつも寝泊まりに來ている義勇隊の子供たちが大根をおろして凍傷になった指を癒してくれる。

「家内が産気づいて苦しんでいる。医者を頼んで欲しい。」と夜中に工員が頼みに來たが、夜中でもあり妊婦を運ぶ方法もなく、会社の守警に「責任を取るから」と強引に会社のバスを出し、市街の産院を回り断られ続け

て、ようやく満人医師の産院で、胎児が横位のため切断して処置してもらい母体を助けたこと。残葉々々で帰るのが遅いため、帰りを待つ祖母との二人世帯へ肉や煙草を届けてやったこと。会社を休み闇物資を錦県へ運び経済警察に捕らえられ、弓長嶺の強制労働収容所へ送られた工員たちを、所長の軍將校と強談判で釈放させたこと。などを思い浮かべ、まるでその逆の理由での取り調べに腹の立つ日々だった敗戦の年の冬。

北満では軍の仕事と開拓団の建設工事に従事していたが、大本営発表の「勝った勝った」に疑問を持ち、昭和十八年暮に奉天市皇姑区の満州車両株式会社に移り、労務担当員として鍛冶、鑄鉄、鑄工の職場に配置される。翌年八月初旬、ソ連軍の侵攻の情報が流れ九日に北陵が爆撃され黒煙が望見される。十五日の重大放送はソ連への宣戦布告と思つたのが敗戦の詔勅。その間の社宅内外の動揺は十五日からはさらに大きく、避難した家族列車は引き返し、北京街道は戦車の壕掘りが続き、資材を会社から運び社宅の周辺を囲み、各所に見張り塔を建てて交替で見張り員を配置し警備態勢に入る。会社に来てい

た使役の囚人五十余人はいち早く脱走し、会社には暴民が襲い略奪が始まり、婦女子は髪を切り男装し、毎日が緊張の連続である。ソ連兵の社宅内の徘徊はしばしばで、そのたびに天井裏に若い女性を隠し、立ち去らせるために時計や万年筆の提供頻繁。

六月下旬、哈爾濱訓練所から勤労挺身隊として百余人が来社、純粹に挺身の意に燃え労働に励むが、敗戦のショックは少年たちには余りにも強烈で、街へ出て目的もなく行動する者、ソ連の使役として旧陸軍の糧秣庫へ行く者、挺身隊の幹部の心労は大変なものと推察される。武装解除され脱走の兵隊や北方から避難してきた人たちを連れてきて、会社内に居住させたりするのも夜中の仕事の一つになる。会社が正式にソ連軍に接収されてようやく身の安全と食がノルマと引き換えに保証され、動揺も安らぐ。

東側の大きな平坦地を挟んで満鉄の社宅があり、高く黒煙が上がった時暴民に襲撃されていると情報が入り、救援に向かった人たちの中で巡回中の八路军から銃撃を受け、平坦地は大混乱となり、社員から死傷者が出た事

件には皆緊張し、白系露人マキシモフの懸命の仲介で収まる異変もあった。

ソ連のノルマは厳しく、指令の機関車組み立ての目標達成のための徹夜作業は頻繁になされた。また、ソ連へ撤収の鉄道のレール運搬では、そのために腰を痛める者が続出のありさまであった。

そのうちに保安隊の呼び出しもなくなり、年も明けて草木が春の息吹を感じ芽を出すころになると、引き揚げの情報が居留民団の方から伝わり始める。労務担当員という一番睨まれる職業柄、会社の引き揚げ団体編入の最初に入れられ、仲田周一氏が団長となる。北陵の収容所で数日を過ごし、荷物検査を終えて無蓋車に乗車するころは、「故国の土を踏むことができたら、」の故国一途の気持ちは、「日本へ帰れる。」のほのかな明るい気持ちになる。途中数回の停車を経て壺芦島収容所に着く。国府軍壺芦島弁事処長から使役六十人を出せとの指令が届くが、届け出る者は少なく、自薦して義勇隊の少年たちを中心に第四十一力行隊を編成する。会社からの引き揚げ大隊を収容所から見送る。残留部隊として六月二十六・

七・八日の三日間、国府軍の弾薬運搬の使役に従事する。二十九日、夢にまで見た引き揚げ船の船尾に翻る日章旗を仰ぎ、思いは遙か日本本土の上空に飛ぶ。異国に散った同胞よ、安らかに眠れ。

生地獄だったシベリアでの労働

長野県 内海 深

私は、役場その他の人々より盛んに満州行きを勧められ、昭和十七年四月に渡満しました。

就職した所は満州国際運輸株式会社という大会社でした。大連に上陸して本社より奉天支社行きを命ぜられ、行った所は奉天支社経理課。早速に上司から勤務についてこと細かに指導を受け始めたが、大変に忙しい仕事で、これでは動まらないかと不安でした。しかし、日がたつにつれて仕事の順序を覚えて大分楽になりました。

時たま得意先へ出張があり、地理に慣れないために大分苦労しました。経理課は総員八十人くらいで、長野県人